

第9課 「キリストにある自由」

* 「自由」とは何か？ 罪の世界に生まれ、今もなおその中で生きており、心の内にも罪を宿す私たちにとって、本当の自由を経験した事がない。それ故に、差し伸べられている神の救いの手を、素直に握り返す事が出来ないのかもしれない。そんな私たちが、自由という安らぎを得る為には、本当の自由を知らねばならない。自分勝手にその本能の赴くままの有様を自由と呼ぶにはあまりにも愚かすぎる。罪という不自由さのままに自由を得る事は不可能だからである。罪という縄でがんじがらめにされている事すら感じられない麻痺した心が、感覚を取り戻そうとする時、私たちは罪による痛みや苦しみを知る事となる。心のリハビリを受けている私たちは、忍耐と希望を持って生きる事が示されている。そして、神は必ず真の解放と自由を私たちに実現して下さる。

1. 奴隷からの解放

- **贖いによる解放**：「贖い」とは奴隷を買い戻し身請けする事であり、イエスはご自分の命を代価として、罪の奴隷となっている私たちを買い戻して下さった。故に私たちは神のものである。
- **絆によって守られる**：私たちは、贖われた事により罪から救い出された。なぜ神は私たちを贖われたのだから？ 私たちに価値があるからか？ 決してそうではない。むしろ罪人である私たちは害がある。無価値どころか災い（それは「罪、悪」という深刻な問題を宇宙全体にまき散らしてしまう可能性が極めて高い）なのかもしれない。贖いは神の一方的で限りなく深い愛による恵みであり、愛するが故に救いを実現して下さる。そして今の状態は相変わらず悪の傾向を持ち続け、罪がその心に宿ったままなのである。考えてみれば危険きわまりない状態であり、更にサタンは常に誘惑をし続ける。だから、イエスと繋がっていないなければならない。イエスは私たちの命綱であり、その絆によって守られている（ローマ8:1）。
- **包み込まれ受け入れられる**：私たちは罪という苦々しさを持っている。神は私を罪故に受け入れることができない。人類の模範、代表、犠牲となられたイエス・キリストとの絆に結ばれつつ、イエスの義と愛に包まれて、イエスに包まれたままの私たちを神は受け入れることができる。神はそれを欲しておられる。
- **罪の奴隷から解放される法則**：私たちがイエスを知る（出会う）と、本来の人間の持つ素晴らしさに気づく。するとイエスと自分の大きな違いを見せられ、自らを吟味する（イエスに対する憧れ）。そこに罪の自覚が生じる。すると心に痛みや悲しみを感ずる。同時に罪に対する無力さを示され、救い主の必要を感じ求める。そして悔い改めに導かれてゆく。罪を告白し、イエスの模範に従う事を望みつつ生きたいと願う。信仰の起伏はあるものの、聖霊の助けと導きによって励まされ助けられ、私たちはイエスに似た者と変えられてゆく（義認と聖化の経験）。信仰により深い絆は更に固く結ばれ、救いの確信へと導かれてゆく（ローマ8:2）。
- **イエスが成し遂げてくれたもの**：律法は救いを私たちに提供できない。本来律法は人を命へと導くものであるが、人は罪故に律法を完全に行なえず、律法は人に死（罪の結果）を宣告するものとなった。命に導くことのできない律法の本来の働きを神はイエスによって成し遂げて下さった。律法が私たちに要求する「義」は、罪に支配されている私の力ではなく、聖霊の導きに従って生きることにより実現される（ローマ8:3~4）。

2. 聖霊の導きと働きによって

- **律法の守り方**：私たちは「肉に従って歩むもの」（罪の奴隷として本能に従って生きるもの）と「霊に従って歩む者」（聖霊によって新生を経験し、聖霊によって生かされている事を自覚している者）に、その生き方が分けられる（その中間はあり得ない）。（ローマ8:5~8）。「肉の思い」に出来ない事は、正しく律法に従うという事である。律法はその性質上、誤用されてしまう場合があるので（罪の自覚を示す。しばしば人を裁く、批判する、差別する事に用いられてしまう）、くれぐれも律法の守り方を間違えない様にしたい。自分の知恵や力、努力などで守ろうとしてしまうが、「イエスの模範に従い、イエスを信じて生きる事」が律法を守り生きる事である事を心得たい。私たちは、律法を見て愕然とするのではなく、律法を完全に全うして下さったイエスを見つめ、信じ、従うことによって義認を得る事を覚えておきたい。
- **弁護者なる聖霊**：聖霊の神は、イエスの御旨を私たちの内に実現する為に、あらゆる助けと導きをして下さっている。聖霊の導きを拒む事は、イエスを否定することを意味し、自らの良心に逆らって生きる。それは明らかに最大の罪である（ヨハネ3:19）。イエスは昇天の際に、弁護者なる聖霊がイエスの御心を示す事を伝えた（ヨハネ16:14）。ローマ8:9~14においてパウロはイエスの言葉を私たちに届けている（ヨハネ16:4~15）。
- **神との関係を深め確かにする為**：イエスは人性を生きる事により、私たちに正しい人の道の模範となられ、人類を代表して完全なる生を全うして下さり、その命を贖いとして、十字架によって罪の結果の死を負

われた。聖霊はイエスの御旨を行い、常に私たちに寄り添いつつ、その心の内に働きかけ、良い心を育み、守り、導き、助け、イエスを示し続けられる。バプテスマによって私たちは象徴的に、イエスと聖霊の働きを示されている（ローマ 8：9～14）。

- **神の子として迎えらる**：「アッバ、父よ」この言葉以上に、神と人類の関係を示す言葉はない。それは、最愛であり、身近であり、何の妨げも遠慮も無い親しい思いが込められている。この本来の関係が罪によって断絶された。神はその切ない思いをイエスを通して示される（イエスと父なる神の関係、それを示す例え話など）。罪の奴隷になた人類が、イエスの命によって贖なわれ神に戻った。神は罪の奴隷であった私たちを、神の奴隷とはせず、養子とされ跡取りとして下さる約束をされた。私たちは神の家族として迎えられ、家族としての責任と役目を負う（アダムに与えられていたもの、愛によって築かれてゆく関係が取り戻される）。果てしなく深い神の愛と恵みによって、聖霊の働きに確信が深められ実現へと導かれる（ローマ 8：15～16）。